

プレイバックシアターのストーリーにおけるテラー経験

小森亜紀¹⁾, 吉川ひろみ²⁾

1) 劇団プレイバックーズ, 2) 県立広島大学保健福祉学部

要旨:プレイバックシアター (PBT) は、観客の中の有志がテラー (語り手) として自分自身の体験を語り、それをアクターが打ち合わせなしに演じる即興劇である。テラーはコンダクター (進行役) のインタビューを受け、自身の体験を語る。このように、プレイバックシアターは、テラー、コンダクター、アクターなど異なる役割の人々が協働することによって成り立つ。本研究の目的は、「PBT のテラーをする」という作業をした人々の主観的経験を明らかにすることである。PBT 公演またはワークショップでのテラー経験者 7 名に、インタビューを行い、質的に分析した。その結果をもとに質問紙を作成し、ワークショップでストーリーのテラーとなった参加者 54 名から回答を得た。回答者の 90%以上が、コンダクターからのインタビュー時に過去の場面が蘇り、感情が高まり、話しながら気づくことがあった。上演中には、再び過去の場面が蘇り、感情が高まっていた。さらに、自分の思いをアクターや観客と共有できたと感じていた。上演後は、自らの経験を再確認でき、気持ちがすっきりし、未来に向かう力がわいたと回答した。テラーをすることは、カタルシスのような心理的効果があると共に、PBT の場を共有する他者との連帯感を体験する機会になると考えられた。

作業科学研究, 10, 68-72, 2016.

キーワード: プレイバックシアター, 語り手, 主観的経験

Short Report

The experience of being a teller in a story of Playback Theatre

Aki KOMORI¹⁾, Hiromi YOSHIKAWA²⁾

1) Playback AZ, 2) Prefectural University of Hiroshima

Abstract : Playback Theatre (PBT) is an improvisational theatre. A conductor (master of ceremonies) interviews one of the audience members, then actors enact the story on the spot. The effectiveness of PBT is based on the collaboration of teller, conductor and performers. The purpose of this study is to explore the teller's subjective experience in PBT. We took two steps to investigate tellers' experiences. As a first step, seven persons were interviewed about their experience after being a teller. Data were analyzed qualitatively. As a second step, we investigated tellers' subjective experience using a questionnaire. 54 persons who attended PBT workshops and became tellers responded to the questionnaire. The results showed that over 90% of the tellers experienced a feeling of vividly recalling the past. When interviewed by the conductor, they experienced deep emotion and new awareness. During the enactment of their story, they once again experienced a feeling of recalling their past, as well as deep emotion, and empathy from performers and audiences. After the enactment, they felt refreshed and empowered to step forward into their future. Being a teller will have psychological effects, such as catalysis, recognition and a sense of solidarity.

Japanese Journal of Occupational Science, 10, 68-72, 2016.

Keywords: Playback Theatre, teller, subjective experience

はじめに

プレイバックシアター (Playback Theatre, 以下 PBT) は、1970 年代に Jonathan Fox が創出した即興劇である。Fox が目指したのは「コミュニティの回復」を行う演劇であり (宗像, 2006), 人々のストーリーを通して, 社会の対話をひろげていくことが PBT の重要な目的である (吉川, 2013)。PBT の全体像を表1に示した。PBT には, 動く彫刻やペアズなど多様な手法があるが, 主な手法はストーリーである。ストーリーの概要を図1に示した。ストーリーでは, 進行役であるコンダクターが, 観客の中から自身の個人的経験を舞台上で語るテラーを募る。コンダクターは舞台上で, テラーのストーリー (経験) をインタビューする。その後, テラーの語りをもとに, アクターが即興劇としてストーリーを演じ, ミュージシャンが楽器を使って音楽を添える。テラーが語るストーリーには, テラーが, いつ, どこで, 何をしたかが含まれており, テラーの人生にとって意味深い作業が語られることが多い。Rowe (2004) は, PBT がもつ「今ここで」という特性が, 行うこと (doing) に注目する作業と深く関連があると述べ, PBT についての考察をしているが, 考察の対象となっているのは, アクターとコンダクターである。本研究は, テラーに焦点を当て, 「PBT のテラーをする」という作業に含ま

れる, ストーリーを語る活動, ストーリーの上演を観る活動によって得られるテラーの主観的経験を明らかにすることを目的とした。

方法

テラーの主観的経験を明らかにするために, 質的研究と質問紙による調査の二つの研究を行った。

1. 質的研究

テラーの主観的経験を深く理解し整理するために, 質的記述的研究法を採用した。対象は, テラー経験が 3 回以内で PBT 公演またはワークショップでテラーになった男性 2 名, 女性 5 名の 7 名である。データ収集は, 半構造化インタビューで行い, 「今回のテラー体験で一番印象的だったこと」, 「語った出来事に対する捉え方の変化」, 「テラーになる意味」を聞いた。必要に応じて適宜質問を追加した。インタビュー時間は 9 ~ 28 分であった。

インタビューは, PBT 実践者の養成校であるスクール・オブ・プレイバックシアター日本校を卒業した後, 同校にて 2 年間の講師経験をもち, 13 年間劇団に在籍し公演や指導を行うなど, PBT について熟知する筆頭研究者が行った。また, インタビュアーはインタビューに先立ち, 対象者がテラーとなった PBT にコンダクターまたは企画者として参加しており, 対象者のストーリーやその上演内容についての知識を有していた。

インタビュー中の会話を録音し, 逐語録を作成し, これをデータとした。データ分析は, グラウンデッドセオリーアプローチを指針とした (戈木, 2005)。インタビューが終了するごとに, 一人ひとりの参加者の逐語録を研究者が各自読み, 研究者の一人が一つの意味ごとにデータを切片化し, 切片ごとにプロパティとディメンションを付けた後にラベル名を付けた。ラベル名を付けた研究者以外の研究者がデータとラベルを照合し, 異論がある場合は合意に達するまで協議した。最初の 3 名が終了した時点で, ラベルの類似性に基づき, 大カテゴリーとサブカテゴリーを抽出した。

倫理的配慮として, インタビュー前に, 研究の目的, データの匿名性を確保すること, 知り得た情報を研究目的以外に使用しないこと, いつでも研究を辞退できることを, 口頭と書面にて説明し, 研究参加の同意を口頭と書面で得た。

2. ワークショップでのテラー経験者への質問紙調査

上記の質的記述的研究法で明らかになったテーマが他の者にも同様に現れるかを確認するため, 2014 年 8 月から

表1 プレイバックシアターの全体像

役割	コンダクター	進行役。テラーにインタビューする
	アクター	テラーの気持ちやストーリーを演じる
	ミュージシャン	ストーリーに音楽を付ける
	テラー	気持ちや経験を語る
	観客	上演やインタビューを観る
手法	ショート フォーム (主なもの)	動く彫刻 気持ちや, 繰り返す動きと声で表現する
		ペアズ 同時に起こる異なる気持ちを, アクターが二人組で演じる
		タブロー いくつかの場面を静止画のようにアクターが表現する
	ストーリー	テラーがストーリーを語りアクターが演じ, ミュージシャンが音楽を奏でる
開催形態	公演	観客の有志がテラーになって語り, 劇団員のアクターが演じる
	ワークショップ	参加者がテラー, アクター, ミュージシャンを経験する

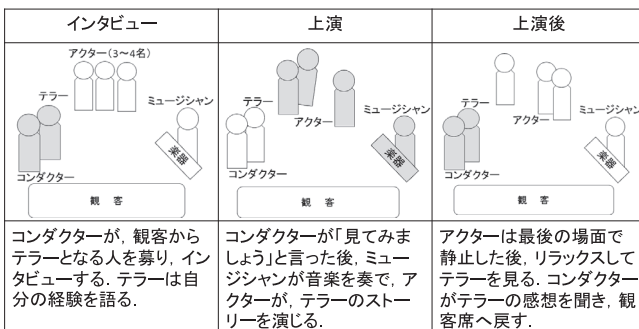


図1 プレイバックシアターの主な手法であるストーリーの概要

2016 年 7 月に、筆者がコンダクターを務めた 13 回の PBT ワークショップに参加し、ストーリーのテラーを経験した者を対象とし質問紙を配布した。質問紙は、質的研究の結果で抽出されたカテゴリーに対し、自分の経験を照らし合わせ、「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」のうちの該当するものを記すよう依頼した。回答は匿名とし、質問紙には結果を関連分野の学会や学術誌で発表する旨を記載した。

結果および考察

1. テラーの経験の枠組み

分析の結果、大カテゴリーとして、【過去への接近】、【過去の再来】、【共有】、【過去の捉え直し】の 4 カテゴリーが抽出された(表2)。以下、大カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、対象者の言葉を「 」を用いて記す。

1) 【過去への接近】: 本カテゴリーは、テラーが自分の体験を語るという活動に関わる主観的経験である。サブカテゴリーとして、< 語りの焦点を絞るタスク>、< 過去の場面の想起>、< (インタビュー中の) 感情の高まり>、< 気づき>が抽出された。テラーは、コンダクターのインタビューに答えることを通して自分のストーリーを語る。これにより、自分の経験の「凝縮をテラーが自分の手でする」過程が生じ、語りの焦点を絞る必要があった。また、過去に起きたことを「絵のように」思いだし、「泣く」など感情の高まりを経験していた。

また、テラーは語りを通し、「まだそんなに感情が残っていた」というように新たな気づきを得ていた。

2) 【過去の再来】: 本カテゴリーは、自分が語ったストーリーをアクターが演じるのを観る活動に関わる主観的経験である。サブカテゴリーとして、< 場面や人との再会>、< (上演中の) 感情の高まり>、< 離れた視点>が抽出された。

テラーは上演中、「人の顔とか言葉のやりとりとか自分の記憶より鮮明に目の前に出てくる」と感じ、場面や人との再会をしていた。また、アクターの言葉や演じる様子に感情の高まりを経験していた。

一方、感情の高まりを覚えながらも、テラーは上演を観ることで「自分と切り離して物語を見れる」と感じた。自分のストーリーを、自分以外の登場人物を含めた再現劇として外から観ることで、離れた視点で捉える体験をした。

3) 【共有】: テラーの主観的経験の第 3 のカテゴリーは、【共有】である。サブカテゴリーとしては、< 上演内容の評価>、< アクターへの思い>、< 経験や思いの共有>が抽出された。テラーは、アクターによる上演について、

表2 テラーの主観的経験についての質的研究の結果

大カテゴリー	サブカテゴリー	語りの例
過去への接近	語りの焦点を絞るタスク	どこで起こったことですか？ひとどこで言うとなんですか？っていう、その凝縮をテラーが自分の手でする必要がある
	過去の場面の想起	場面を話しながら絵が浮かんだというか、あのときの自分の体験した場面や状況や人が、それこそブレイバックじゃないけど、思い起こされました
	(インタビュー中の) 感情の高まり	自分がとても、そのときに泣いていたんですけど、そのビントがシュって合ったときにすごい自分が反応したなって思ったんですね
	気づき	自分にそのことに関してまだそんなに沢山の感情が残っていたんだということが印象的だった
過去の再来	場面や人との再会	ずいぶん前の話なのに、再現している人の顔とか言葉のやりとりとか、自分の記憶よりずっと鮮明に目の前にできた
	(上演中の) 感情の高まり	今思い起こすと、特に最後の部分の僕を演じていた方の言葉だったり、演じるさまそのものにはすごく感情移入したというか、あのときの自分と重ね合わせるものがあった
	離れた視点	普通は自分の経験は主観でしか見れないのに自分の経験を客観の位置から見れるっていうのがなんか違う経験だったのか、ちょっと自分と切り離して物語を見れるっていう気持ち
共有	上演内容の評価	全くの再現ではないので、私と彼のやったやりとりとは、見ようによっては違うんです。一中略一微妙に違ってたんだけど、お互い真剣にやっていた部分は共通
	アクターへの思い	一生懸命演じてくれてありがたいなと思いました
	経験や思いの共有	あの場で場所を借りて話をできて、いろんな人に聴いてもらえた、共有してもらえたということも意味があるだろうし
過去の捉え直し	確認と再解釈	過去の自分の経験を話したんですけど、その時にその状況を納得していたつもりだったのに、こうだったのではないかと、とまとめ直すというか、解釈し直すことができた
	すっきりとした気持ち	その時(経験した時)は違和感があったことが、違和感が少なくなったりとか、穏やかな気持ちになった
	未来への志向	向かい合うことができたことによって、より少し次に向かう力になったというか一中略一色んなことがありながら前に行くんだっていうようなことをそのとき考えられたので

自分の実際の経験と「微妙に違う」部分や「共通」の部分があると上演内容の評価をしていた。また、アクターが自分の思いを汲みとり、「一生懸命演じてくれる」ことに感謝の思い抱いていた。各務(2012)は、企業内で行った PBT ワークショップ後のアンケートに「自分の大切な思い出をアクターの人達が必死に演じようとしてくれている姿が、思い出を共有してくれているようで、とても嬉しかった」という記載があったと報告した。羽地(2005)は、小学校で校長先生のストーリーを小学生のアクターが演じた後、校長先生が「嬉しい、この通りだった。あの子は僕の気持ちをよくわかってくれた」と目を潤ませていたと紹介している。PBT の非日常性が、先生と生徒という関係とは違う人としての対等な関係を作り上げたという。本研究でもこれと同様に、真剣に演じるアクターへの肯定的感情が語られた。

さらにテラーは、「あの場で、場所を借りて話をできて、いろんな人に聴いてもらえた、共有してもらえた」というように、自分の経験を観客と共有したという経験をしていた。宗像(2006)は、テラーである自分と共に涙している観客を見た経験を記し、その経験は、味方を得ること、他人の暖かい支援を受けること、周囲とのつながりを確認することであったと述べている。このように、共に過ごす人々

が、PBTを通じてコミュニティの一員としてつながり合う効果があると考えられる。

4)【過去の捉え直し】:【過去の捉え直し】では、＜確認と再解釈＞、＜すっきりとした気持ち＞、＜未来への志向＞という3つのサブカテゴリーが抽出された。テラーは、自分の過去について再確認をしたり、「その時にその状況を納得していたつもりだったのに、こうだったのではないかな、とまとめ直すというか、解釈し直すことができた」と、これまでとは異なる新たな解釈を獲得したりしていた。ストーリーを語る活動を通しての気づきや、上演を観る活動による離れた視点の獲得も影響し、両活動を通して、＜確認と再解釈＞が行われたと考えられる。このような経験は、リフレーミングとしてとらえられるかもしれない。リフレーミングとは、事実を事実として認めるが、事実を背後から支える枠組みを変えることで、全体としての意味を変えることであり、家族療法の中で面接技法として使われている（長谷川，2011）。テラー経験の結果、出来事をより広い背景を含めて見る事になり、リフレームの機会を得ていると考えられる。

また、上演後のテラーはすっきりとした気持ちになった。このような爽快感はカタルシスとしてとらえられる。抑えられていた感情を、言葉を通して表現しつくすことにカタルシスの意味があると考えられている（増野，1989）。Foxは、PBTでは語るよりも演じることを重視すると述べ、演技を見ているテラーに起こるカタルシスを受動的なカタルシスと表現している（宗像，2006）。

さらに、テラー経験の後、「前に進んでいく」というように自身の生活についての＜未来への志向＞が生まれていた。

2. 質問紙から得られたテラーの経験

テラー経験者は54名で、全員から回答を得た。回答の結果を図2に示した。14項目すべてにおいて70%以上が肯定的な回答だった。90%以上が肯定的回答をした10項目は、インタビュー中の「過去の場面が蘇ってきた（100%）」「感情の高まりがあった（100%）」「話しながら気づくことがあった（100%）」、上演中の「過去の場面や人が蘇ってきた（98%）」「感情の高まりがあった（96%）」「経験や思いをアクトと共有できた（98%）」「経験や思いを観客と共有できた（96%）」、上演後の「自分の体験を再確認できたと感じた（98%）」「気持ちがすっきりした（92%）」「未来に向かう力がわいた（94%）」であった。つまり、コンダクターからのインタビュー時に過去の場面が蘇り、感情が高まり、話しながら気づくことがあった。上演中には、再び過去の場面が蘇り、感情が高まり、自分の思いをアクトや観客と共有できた。上演後は、

自らの経験を再確認でき、気持ちがすっきりし、未来に向かう力がわいたという経験をした回答者が90%以上であった。このように、7名のテラーの経験の質的研究により抽出されたカテゴリーは、他の多くのテラーの経験と一致していた。

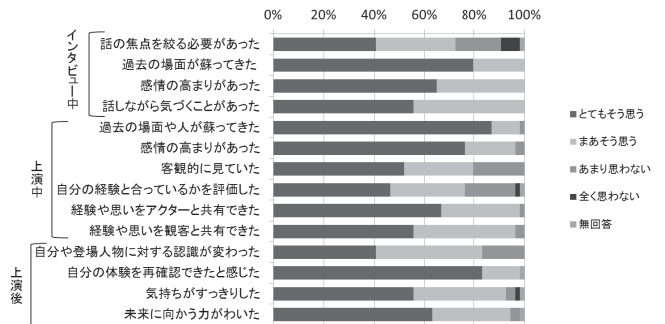


図2 ワークショップのストーリーにおけるテラーの主観的経験(N=54)

まとめ

7名のテラーへのインタビューを行った質的研究により、テラーはインタビュー中に自らの過去に接近し、上演中に過去の再来を体験していることが分かった。さらに、テラー経験を通して自身の体験をアクトや観客と共有し、過去の捉え直しを行っていた。また、54名のテラーへの14項目の質問紙調査では、これらの体験が70%のテラーにおいても同様にみられた。このことから、「PBTのテラーをする」という作業を経験した者の多くに共通して体験される過程である可能性が示唆された。

文献

- Clark, F. (1993). Occupation embedded in a real life: interweaving occupational science and occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy*, 47, 1067-1077.
- 羽地朝和 (2005). プレイバック・シアター語るなかで育まれるもの. *現代のエスプリ 459 サイコドラマの現在*, 至文堂, pp. 174-188.
- 長谷川啓三 (2011). 基本技法. 大熊保彦編. *現代のエスプリ 523 リフレーミング: その理論と実際*, 至文堂, pp. 41-53.
- 各務勝博 (2012). プレイバックシアターの活用—日本の企業内研修におけるその位置—. *Core Ethics 立命館大学大学院先端総合学術研究科紀要*, 8, 461-472.
- 増野肇 (1989). *心理劇とその世界*. 金剛出版.
- 宗像佳代 (2006). *プレイバックシアター入門: 脚本のない即興劇*. 明石書店.
- Rowe N. (2004). The drama of doing: Occupation and the

here-and-now. *Journal of Occupational Science*, 11, 75-79.

戈木クレイグヒル茂子 (2005). 質的研究方法ゼミナール : グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ. 医学書院.

吉川ひろみ (2009). 作業の意味を考えるための枠組みの開発. *作業科学研究*, 3, 20-28

吉川ひろみ (2013). ジョナサン・フォックス氏へのインタビュー. *作業科学研究*, 7, 28-32.